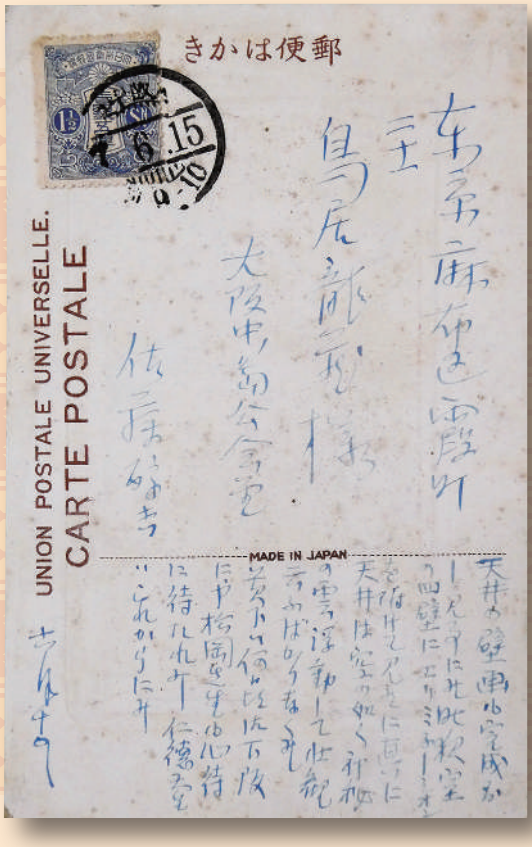
鳥居龍蔵記念博物館
NEWS LETTER

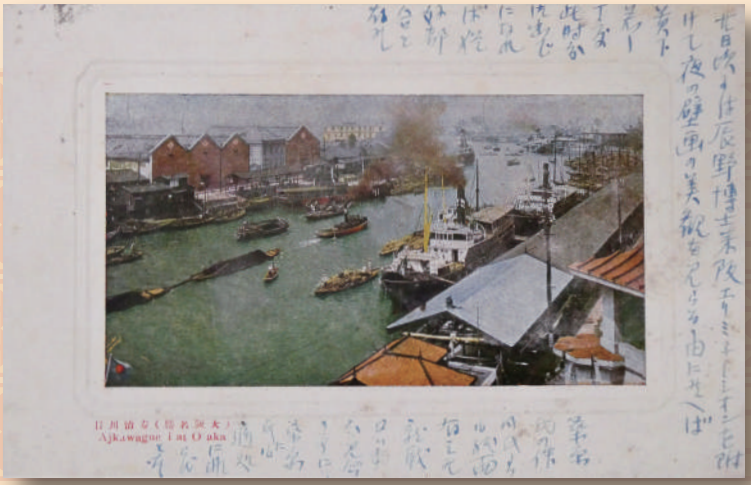
4

2023 Autumn

Tokushima Prefectual
Torii Ryuzo
Memorial Museum



鳥居龍蔵あて佐藤醇吉の絵葉書
1917年6月10日付け



大阪の中之島公会堂特別室にある壁画の写真

今回は、洋画家で鳥居龍蔵の朝鮮半島調査などに協力した佐藤醇吉（さとうじゅんきち）（1876－1958）が、1917（大正6）年に鳥居あてに出した絵葉書を紹介します。

この絵葉書には、佐藤の洋画の師であった松岡壽（まつおかひさし）（1862－1944）による、中之島公会堂（現大阪市中央公会堂）の壁画制作の進捗状況が書かれています。これは、松岡が神話時代の壁画を制作するにあたって、鳥居に相談した経緯があったからです。

この絵葉書からは、鳥居の幅広い人的ネットワークがうかがえます。

（下田順一）

今季の逸品

鳥居龍蔵あて佐藤醇吉の絵葉書

文化の森総合公園
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

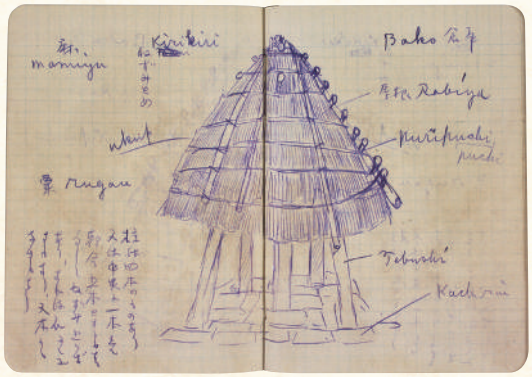
資料でたどる、鳥居龍蔵の学問と生涯

第4章　「たかさごのたび」から「那賀のあら妙」、そして「西清のたび」へ

今回は、鳥居龍蔵の青年期後半にあたる、30代前半の調査活動を、現地調査で記された3冊のフィールドノートに即して紹介していきましょう。

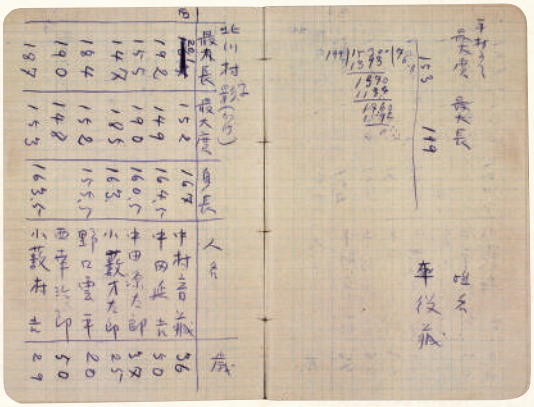
第4回調査の行程

30代最初の調査は、1900（明治33）年に行われた第4回台湾調査です。20代後半に連続して行われた台湾でのフィールドワークの延長上に位置づけられる活動で、調査期間は9ヶ月間に及び、都合5回行われた台湾調査のなかでも最も長期間にわたる調査となりました。調査の範囲は、台湾を南北につらぬく中央山脈に沿った地域で、多様な先住民族が生活する山岳地帯を南から北へと縦走しています。この調査行を記録したのが、フィールドノート「たかさごのたび」計八巻です。概ね日付単位で、要所々々に時刻が記された日記形式のノートで、調査過程で出会った人々（人名）や訪れた土地（地名）が詳細に書かれており、調査当時の様子を復元するのに有効です。文章の合間に、鳥居の専門である形質人類学調査の基本的な調査方法である身体計測の数値、家屋の建て方や室内装飾の様子、民族衣装のデザインや着衣の方法、また弓の射法や、近辺の地質、土層についてのスケッチが描かれており、比較文化論的な検討の恰好（かっこう）の素材となっています。


「たかさごのたび」に描かれた先住民族の倉庫

その翌年、1901年には、海外調査の合間を縫って、徳島県内での調査が行われています。木頭地方（那賀町）での調査がそれであり、これを記録したのがフィールドノート「那賀（なか）のあら妙（たえ）」です。「たかさごのたび」と同様の、時系列に調査内容を記す日記形式のノートで、随所に山村での生活に関わるスケッチが配されていること、身体計測の数値が記されていることなども共通しています。第4回台湾調査と木頭地方調査は、1年違いで連続して行われており、ノートの記載方法や実際の調査方法などにも共通点が多いので

木頭地方で撮影された家族



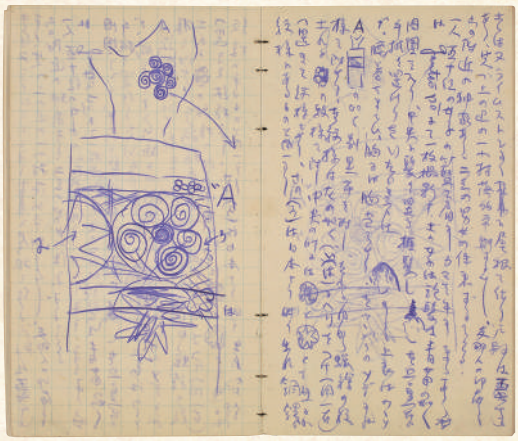
「那賀のあら妙」に記された身体計測のデータ

蘆笙を吹く苗族の少年と村の人々

す。後に鳥居は、木頭地方を近代的な俗化の進んでいない「武陵桃源の地」として雑誌に紹介文を書いており、ここからは、彼がこの地方を、日本の山村の原風景を代表するものと認識し、前年に行われた台湾山岳地帯での民族調査と比較検討することのできる、貴重なフィールドと考えていた様子が窺われます。

一方で、第4回台湾調査は、鳥居が中国大陸西南部に目を向けるきっかけともなっていきました。

自叙伝『ある老学徒の手記』に、「私は台湾島の人類学上調査から、さらに前岸、西南支那大陸に渡って印度支那民族たる苗族（Miao tribes）の調査をしたいと思い、その旨を坪井先生を通じて、東京帝国大学に申出た」とあるのがそれです。調査は1902年から翌年にかけて行われ、それを記録したのがフィールドノート「西清のたび」なのです。ここでいう「西清」とは、今日の中華人民共和国の西南部、おおよその範囲は貴州省、雲南省、四川省にまたがる地域を指します。現在でも多くの「非漢民族」（少数民族）が暮らす地域で、漢民族とパッチワーク状に居住域が組み合う状況となっています。鳥居は、この地域をぐるりと一周廻るように広域調査を行ったのです。彼は、苗族の身体的な特徴や言語、文化等を調査するなかで、衣服に施されている幾何学的な紋様に注目し、これをフィールドノートにスケッチしています。またその模様が、彼らが使用する青銅製の太鼓である銅鼓の紋様と同一であること、さらに、日本の銅鐸の渦巻紋や鋸歯紋とも類似することに気づき考察を加えました。この発見が、苗族などのインドシナ民族と日本人との関係を検討するきっかけとなっていきました。身近な衣服紋様の観察から、彼が後に提唱する日本人起源論の南方ルートの着想が芽生えていったのです。



「西清のたび」に描かれた衣服の紋様

西南中国での調査をさかいに、鳥居の東アジア南部での調査は一段落し、彼の関心は、後年の主要テーマとなる中国東北部・内モンゴル、朝鮮半島、東部シベリアなど、北東アジア方面での調査にシフトしていきました。（石井伸夫）

ゆかりの地
今昔

鳥居龍蔵の見た
野村八幡古墳

徳島県美馬市脇町に、野村八幡神社という神社があります。この神社は吉野川北岸の段丘上に鎮座しており、参道の階段を上ると社殿が姿を現します。そして社殿のすぐ東隣には南側に開口した横穴式石室を持つ後期古墳があります。

この古墳は野村八幡古墳と呼ばれています。美馬市近傍に特徴的に見られるドーム状の天井を持つ石室の古墳で、この型式のものとしては国史跡・「段の塚穴」の太鼓塚古墳に次ぐ規模を持つことから、 1978（昭和53）年に県の史跡に指定されました。1980年から82年にかけて脇町高等学校の郷土研究同好会が実測調査し、その成果では高さ約5ｍ、直径約25ｍの円墳とされています。現在、古墳の南西部分は、社殿が傍に建てられていることもあって、大きく削られています。

少年期の鳥居龍蔵も、この古墳を訪れた一人でした。彼が1886（明治19）年頃に使用したと考えられる手帳には、野村八幡古墳に関するスケッチとメモが残されており、「美馬郡野村八幡神社々地内に塚穴アリ、図ノ如シ、丘ノ上ニアリ、丘高サ五間」とあります（写真1）。

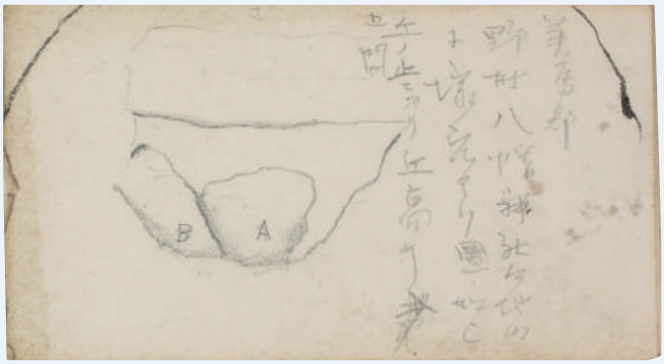


写真１　鳥居龍蔵による野村八幡古墳のスケッチ

ここで現在の野村八幡古墳を見てみましょう（写真2）。羨道の入口の天井には、横向きに巨石が据えられています。これと鳥居のスケッチを比較すると、 巨石と思われるA、Bの上にうっすらと描かれている、横長の構造物がそれに対応するものであると思われます。

写真２　現在の野村八幡古墳。羨道入口部分の様子

しかし鳥居が記したスケッチと、現在の野村八幡古墳との間には、違いもあります。鳥居のスケッチ中に見えているA、Bの巨石は、現在の野村八幡古墳では確認できません。

写真2を見ると、羨道の入口よりも手前に、羨道の壁材として使われているものと同じような石が確認できます。ここから、かつての野村八幡古墳の羨道は、現在よりも手前まで伸びていた可能性があり、長い年月を経る中で風化によって、または人の手が加わることによって少しずつ崩れていき、今日のような状態になったと推測されます。その過程で羨道の壁面や天井に使われていた石が崩れ落ち、そうした石の一部が、鳥居のスケッチ中のA、Bとして記録されたと思われます。　（坂東　泰）

資料整理の最前線

国宝「鋳銅刻画蔵王権現像」と鳥居親子

鳥居龍蔵は、報知新聞社から新東京十二景の選定を頼まれ、1932（昭和7）年7月18日に、同社の人たちとともに西新井大師総持寺（現東京都港区西新井）を訪れました。一行が寺の奥座敷に向かう途中、床の間に鏡のようなものがあったので調べると、1001（長保3）年の銘を持つ鏡像でした。これが現在国宝に指定されている「鋳銅刻画蔵王権現像」の発見です。

実物は現在、東京国立博物館の本館で展示されています。下部が欠けていますが、磨かれた青銅の平面に、怒りを表す明王と、まわりを囲む鬼形の眷属たちが線刻されています。鳥居はこの鏡像を見たとき、驚きと喜びとで満たされました。

写真1　鏡像を調査する鳥居親子の写真
（向かって右が龍蔵、左が龍次郎）（当館蔵）

当館には、鳥居と息子の龍次郎が、鏡像を調査しているときの写真があります（写真1）。写真の裏には、鳥居が「西新井大師発見金剛童子鏡を見る／龍蔵と龍次郎（報知新聞社撮影）」と記しています。尊名が金剛童子とありますが、金剛童子の図像などをもとに蔵王権現が日本で成立し、信仰されたことから、いまは名称が蔵王権現にかえられています。龍次郎は当時まだ16歳でした。

鳥居は龍次郎と連名で、武蔵野会の機関誌「武蔵野」通巻第84号（1933（昭和8）年3月25日発行）に「西新井大師で発見した金剛童子鏡に就いて」の記事を載せ、文中で上記の写真を使っています。また口絵には、龍次郎が写しとった鏡像の図をかかげています（写真2）。「武蔵野」の連名記事には、大発見の喜びとともに、息子のはたらきを知ってほしいという、鳥居の素直な親心も表れています。

（大橋俊雄）

写真2　「武蔵野」の口絵に載る鋳銅刻画蔵王権現像の図。「鳥居龍次郎謹写」とある。

鳥居龍蔵が訪れた台湾・力里旧社

本年（2023年）2月7～12日の期間、筆者を含む数名の職員が台湾を訪れ、鳥居龍蔵の足跡をたどる現地調査を行いました。国立台湾史前文化博物館の協力により複数の場所をめぐりましたが、私が特に印象に残っている場所は、台湾先住民のパイワン族が住んでいた力里旧社（りきりきゅうしゃ）です（図1）。

力里旧社は、台湾屏東（へいとう）県春日郷（けんかすがきょう）の山間部に位置しており、車で山道を進むこと約3時間の場所にあります。1960～70年代にかけて、力里旧社の人びとは山の麓（ふもと）に移住したため、現在この場所に人は住んでいません（「旧社」は「旧村」の意）。現地では、子どもの頃に力里旧社で生活していた方から、当時の村の状況をうかがうことができました（図2）。ここでは、フィールドノート「たかさごのたび一」をもとに、鳥居が訪れたときの様子を紹介したいと思います。

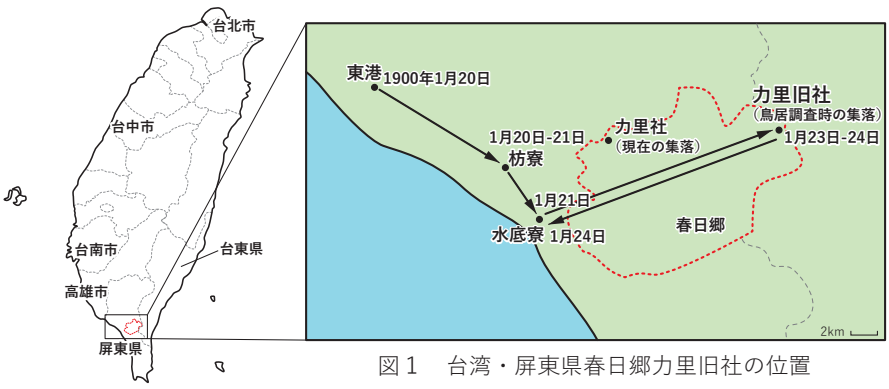


図1　台湾・屏東県春日郷力里旧社の位置

1900年（明治33）1月、鳥居は第4回台湾調査のときに力里旧社を訪問します。1月20日朝、東港（とうこう）を出発した鳥居は、午後に枋寮（ぼうりょう）に到着します。21日に水底寮（すいていりょう）にいる通事（つうじ）（通訳）を訪れ（以下、通事と同行）、力里旧社に向け出発するのは22日です。そして23日に到着し、鳥居らは出迎えを受けます。

力里旧社では通事の案内のもと、「頭人（とうにん）」（リーダー）の家を訪れます。「たかさごのたび一」には、「頭人は未だ三十前後の男にて極めて親切なる人なり」とあり、さらに「我等の為めに落花生、芋などを出し、且つ例の木を彫りなせるさかづきに粟酒を盛り、我等にふれまハれぬ」と記されています。鳥居らが落花生や芋、さらに酒の振舞を受けたことがわかります。その後、鳥居は目に映るさまざまな事柄をノートに書き留めています。例えば、子どもの風俗や遊び、手や腕の入墨（いれずみ）（図3）、弓の射法、家屋の構造などです。文字による情報とともに豊富なスケッチが描かれている点に、「たかさごのたび一」の特徴があります。

今回、台湾を訪問することで、あらためて鳥居が遺したフィールドノートの情報の豊富さや資料的価値の高さを実感することができました。今後も引き続き台湾との交流を深め、調査研究を進めていきたいと思います。

（松永友和）

図2　力里旧社で解説をうける（2023年2月10日撮影）

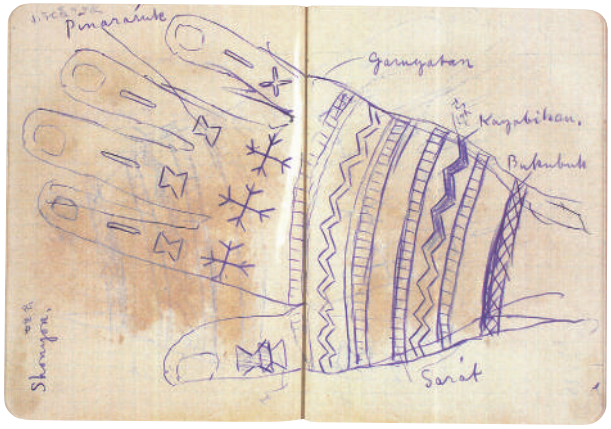


図3　入墨のスケッチ（「たかさごのたび一」より、当館蔵）

台湾との学術交流について

2021年3月、鳥居龍蔵の生誕150周年及び開館10周年記念シンポジウムを実施した際に、国立台湾史前文化博物館（以下、「史前館」）の王長華館長（当時）にメッセージをいただいたことがきっかけとなって、史前館と当館との交流が始まりました。以後、オンラインでの会議や研究会を積み重ね、2022年9月には博物館相互の交流や共同学術調査の継続的な実施のため、連携協定を締結しました。

特に、史前館との共同調査として注力しているのが、当館がデジタルアーカイブで公開している鳥居の台湾フィールドノートの解読作業です。史前館の研究者たちは、非常に意欲的で、こちらが圧倒されるほどです。鳥居は、19世紀末から20世紀初頭にかけて台湾で多くの先住民族について人類学的な調査を行いました。フィールドノートには、鳥居が現地で先住民族との交流のなかから、直に見聞きした情報が多く含まれているのです。

このフィールドノートの解読作業は、なかなか困難である一方、記された内容が判明した時は、感慨もひとしおです。記述は、いわゆる「くずし字」でなされており、しかも台湾の先住民族に関するモノ、言葉、地名が記されています。フィールドノートの解読には、「くずし字」の知識、台湾の先住民族に関する知識、現地の土地勘などが総合的に求められ、まさに両館の共同作業が必要となるわけです。

このような解読作業から得られた知見などをもとに、2023年3月12日に台湾の研究者を徳島に招き、文化の森で国際シンポジウム「鳥居龍蔵と台湾―資料の可能性を探る―」を開催しました。当日は、最新の研究成果が報告され、熱心な議論が行われました。

また、シンポジウムの前後には、台湾の研究者と合同で展示視察や資料調査を実施しました。3月11日に当館、3月13日から14日にかけて、台湾の先住民族に関する資料を多く所蔵する天理大学附属天理参考館、国立民族学博物館、そして関西大学博物館の３館で視察･調査を行い、有意義な活動となりました。今後も、このような共同研究を継続・発展させていきたいと思います。

（小林篤正）

写真１　当館における共同資料調査の様子
2023年3月11日

写真２　国際シンポジウムにおけるパネルディスカッションの様子
2023年3月12日

鳥居龍蔵記念博物館の普及行事について

ここでは、当館が令和5年度上半期に実施した普及行事と、今後の予定をお知らせします。

鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム ガイダンス講座 （7月16日）

県内の中学生と高校生を対象に、自主研究の基礎的な方法であるフィールドワークを実体験してもらう講座です。

写真は、八万町の地神塔と水神・山神塔について、講師の西本沙織氏（徳島市教育委員会）に解説していただいた際の様子です。

夏休み自由研究スペシャル 「みんなで発見！！鳥居龍蔵を知ろう！！」 （8月6日）

小学生を対象に、夏休み自由研究の課題とすることで、鳥居龍蔵について詳しく知ってもらおうという行事です。

写真は、当館の常設展示室にて、学芸員の解説に熱心に聞き入る参加者の様子です。

文化の森　サマーフェスティバル 「絵あわせパズルにチャレンジ！」（8月11日）

文化の森全館あげてのイベントにおいて実施したものです。鳥居龍蔵が収集した民族資料などの画像を「絵あわせパズル」にし、鳥居の活動を知ってもらいました。

写真は、親子連れの参加者が、パズルを楽しんでいる様子です。

令和5年度　鳥居龍蔵セミナー　第4回 （9月3日）

当館の学芸員らが日常的に取り組んでいる研究テーマについて、わかりやすくお話する連続講座です。

写真は、第4回「台湾人類学の先駆者・伊能嘉矩と鳥居龍蔵」の様子です。

今後の予定

- 企画展「台湾世界を往く ―鳥居龍蔵の見た海・山・ひと・ムラ―」 令和6年1月27日（土）～3月3日（日）
- 鳥居龍蔵記念　徳島歴史文化フォーラム　令和6年2月17日（土）
- 鳥居龍蔵記念　全国高校生歴史文化フォーラム　令和6年2月18日（日）

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館　NEWS LETTER　No.4
発行年月日　2023年10月30日
編集・発行　徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
〒770-8070 徳島市八万町向寺山（文化の森総合公園内）
TEL 088-668-2544　FAX 088-668-7197
https://torii-museum.bunmori.tokushima.jp